山本神父様・峰神父様へ ●子供達からのメッセージ。

「島のひかり」ホームページアドレス

https://shimanohikari.jimdofree.com/

発　行
カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959㉓0072
印　刷・㈲才津印刷所

使命を生きる

主任司祭　工藤　秀晃

平安時代の天台宗の僧侶で、親鸞聖人が七高僧と称して尊ぶその第六祖に、幼名を千菊丸と言い、源信の名でも知られる恵心僧都（えしんそうず）なる僧侶がいました。（ちなみに、「一休さん」でおなじみの一休宗純和尚の幼名も同じ千菊丸です。）

のちに『往生要集』を著したことでも知られるこの大僧正には、今日にいたるまで語り継がれる、その母とのひとつのエピソードがあります。

恵心僧都は、信仰心に篤い母の導きで、九歳で比叡山に登り仏門に入り、十三歳のとき得度（とくど）して「源信」の名が与えられ、その学名を高く評価され、十五歳のとき村上天皇の前で『称讃浄土教』を講じ、いたく感動された天皇は、その褒美として数々の品と「僧都」の位を与えられました。それを喜んだ源信は、故郷の母にその褒美の品を送ったところ、母はその褒美の品を送り返し、一緒に添えられた手紙には一つの和歌が書かれていました。

〈後の世を渡す橋とぞ思いしに世渡る僧となるぞ悲しき〉

意訳すると、「あなたを出家させたのは、この世で苦しみ迷う人々に生きる喜びの灯をともし、仏の世界に渡してあげる橋の役目を担ってもらえると思ったからです。

ところが、あなたは位が上がった、褒美の品を頂いたと、我が身の自慢をしているだけではありませんか。それでは、単なる世渡りの道と変わりません。そんな世渡りのための僧であるならば、母はこの上なく悲しみで一杯です」といった具合になるでしょうか。

この母の手紙を読み、どこかで地位や名誉を求めている己の心に気がついた源信は、さらなる仏道の精進を心に決め、念仏三昧の日々を送り、三十数年後、

2ページへ続く

その母は、念仏を唱える源信の膝を枕に安らかな往生を遂げたといわれます。

また、この母の死後、その供養のために著した『往生要集』が、後の浄土宗を通じ多くの人々の救いの一助・喜びの灯となったことは、知られているところです。

この親子のエピソードを味わうとき、一つのことに気づかされます。それは、「使命を生きる」とは、いつの時代においても自分ひとりの力や業ではなく、深き祈りを捧げた人と、その祈りを一身に受けた人が、共に創り上げるものなのだということに。

祝

峰 徳美神父様 ダイヤモンド祝
山本一郎神父様 銀祝

二〇二二年、我々小教区出身である峰徳美神父様と山本一郎神父様は司祭叙階の節目であるダイヤモンド祝（六十周年）、銀祝（二十五周年）を迎えられました。

小教区信徒で何かできないかとお祝いと霊的花束をお渡しする事ができました。

また十月十日には、赤尾議長の『今しかできません』の説得もあり、山本一郎神父様による記念ミサが行われました。代表挨拶では同級生の浜口幸隆さんによる、神父様の人柄が分かるエピソードを交えたお祝いの言葉に感動しました。

山本神父様より信仰について子や孫に伝えていくには、『どうあってほしいと思うだけではなく、自分の思いをはっきりと口により伝える事が大切です』とのお言葉に改めて考えさせられました。

祝!! 洗礼式

木ノ口の鍋内生雄・初恵さんの息子である慎（まこと）さん・啓加さん夫妻は、娘の一凜（いちり）ちゃんの洗礼式を八月十五日の祭日に合わせて行いました。盆の里帰りで行われた事もあり、多くの兄弟・姉妹に囲まれた和やかな式となりました。

祝 下五島地区女性部 ソフトバレー大会 優勝

九月二十三日、三井楽多目的研修集会施設にて「下五島地区女性部親睦ミニ・バレーボール大会」が開催されました。

今回は浦頭小教区、福江小教区、三井楽小教区、水ノ浦小教区、司祭団の参加でした。

今年はユニフォームを神父様が準備して下さり、更に一体感が!!試合は総当たり戦で行われました。試合中はナイスプレーやお互いのフォローもあり、信徒の皆様の応援や子供達の声援のおかげで優勝することができました。

翌日は全身筋肉痛でしたが、楽しく参加でき皆様に感謝です。

赤尾　美紀

九月二十三日、下五島地区女性部ミニ・バレー大会、交流会が三井楽多目的研修集会施設にて開催されました。

今回は、福江小教区、三井楽小教区、水ノ浦小教区、浦頭小教区、司祭団チームとの交流戦です。

我が浦頭チームは、工藤神父様が、この日の為に作って下さった鮮やかな黄色のユニフォームを着ての参戦。当日は、若いママ達の加入もあり、パワーアップ!!他の小教区も、負けず劣らず妙技をふるい、ラリーの応戦も続くなど、和気あいあいの盛り上がりとなりました。

又、神父様方もフットワークの良さで、生き生きと楽しんでおられました。

結果は、見事に我が浦頭小教区の優勝で、万々歳!!

ヤングパワーとチームワークの勝利でしょう。優勝トロフィー、副賞にビール他、たくさんのおみやげをいただき、笑顔でこの交流会を終えることが出来ました。

遠くまで応援に駆けつけて下さった地域の方々、役員の皆様、助っ人で大活躍して下さったアンナ会の方々、そして選手として出場して下さった皆さん、本当にお疲れ様でした。

感謝致します。ありがとうございました。

出口　澄子

ソフトバレー大会は福江、三井楽、水ノ浦と総当たり戦で行われました。

私自身、初めての参加でしたが、家族や周りの方が息子と一緒に応援してくれて、楽しくプレーさせてもらいました。どの試合も接戦で盛り上がりました。浦頭はチーム一丸となり優勝する事ができました。

この大会の一番の見所は、普段は見られない神父様達の跳ねる姿や、素早いプレーが見られる事かもしれません。

大会の準備や運営に携わって下さった方々、ありがとうございました。楽しい交流会でした。

鍋内　怜美（さとみ）

奥浦慈恵院の歴史②

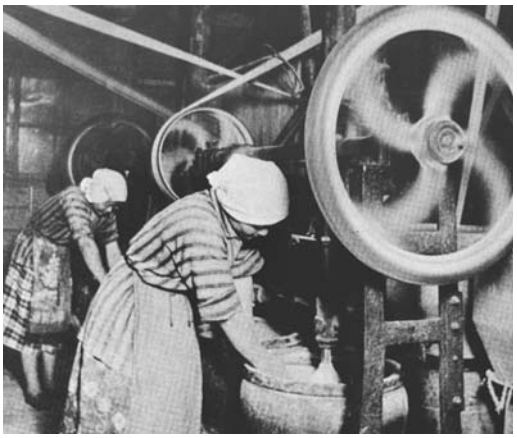
パリ外国宣教会は一六六三年、海外の宣教地で教会を設立し、現地人司祭を育成することを目的に設立されました。修道会ではなく、有志の教区司祭が結成した海外宣教グループです。会員は本国を出発する際、三つの約束をします。第一は生涯をそこで終わること。新しい文化や生活習慣を身に付けることは、数年で出来る事ではないので、生涯をかけて、その国の歴史や文化を学ぶことから始める。第二は教師のように福音を教えるのではなく、人々の中に入って彼らから学ぶ姿勢を持つこと、宣教地の文化（言語、食べ物、生活習慣）を自分たちの生活に取り入れ、対決ではなく、対話を通じて福音を語ること。第三は政治とは関わらないこと。政治に無関心と言うのではなく、司祭の立場を利用して特定の偽政者とつながらないことです。

信仰の自由が得られるようになって、日本の教会の司牧を委ねられたのは、パリ外国宣教会でした。司牧だけでなく、教会建築、司祭養成などの任務を合わせ持っていました。「地域の必要に応じた救済、救助活動」もその任務のひとつでした。この任務のため、パリ外国宣教会の司祭たちは建築、医療、印刷、社会福祉、教授など、いろいろな技術や能力を身につけていきました。

明治十三年、パリ外国宣教会のマルマン師は下五島地区の司牧を委任され、下五島奥浦村大泊に拠点を置き活動をはじめました。この頃、日本では「子おろし」「間引き」が全国的に行われており、五島地方でも生活の窮乏を避けるための人口制限として「間引き」を行う習慣がありました。また、この地方には奇形児、重度心身障害、不具児はもちろんのこと、双生児も縁起の悪いこととされる風習があり、「間引き」「捨て子」の対象となっていました。

奥浦村大泊にキリスト信者で産婆をしていた梅木マセという女性がいました。彼女は、当時産婆が非常に少なかったので、多くの地区を巡り妊婦や産まれてくる子どもの為に必要な援助を与えていました。巡回しているうちに、彼女は貧しい人々の間に、貧しさよりも大きな悲惨があることを見ました。彼女はこの仕事に携わる中で、「間引き」という黙認された悪習の悲惨さを見てきました。彼女は、これらの事を主任司祭として赴任してきたマルマン師に報告しました。

マルマン師はこの報告を聞き深く心を痛め、早速、このような不幸な子ども達の救済に乗り出しました。その教区の教え方をしながらマルマン師の賄いを務めていた濱崎ツイ（当時二十一歳）に、遺棄された子どもの世話をするように依頼しました。そして、大泊にある梅木マセの家屋を借受けて養育を始めました。この時、五人の子どもが収容されました。明治十三年十月十七日のことです。これが現在の児童養護施設奥浦慈恵院の起こりです。



ふるさとの信仰

中村長八師に学ぶ(2)

ふるさとの偉人、霊的師と仰ぐ中村長八神父様はブラジルだけではなく、南米の神父様方からも尊敬されています。

先日、ミサを司式してくださったアルゼンチンの神父様が、次のように話されました。「私は五島に大学生を連れて行きましたよ。中村師のブラジルでの活躍を知って、大学生と彼の生誕の島を訪問しました」と。その言葉を聞いたとき、同郷人として中村師の宣教精神をさらに学び、倣(なら)っていきたいと思いました。

今後、島のひかりを通して中村師がブラジルから送った便りの一部を紹介したいと思います。

まず、中村師の手紙から学ぶ印象を幾つか紹介します。

。文章が力強く説得力がある

。熱意と忍耐力が伝わる文面

。活動内容が具体的で鮮明

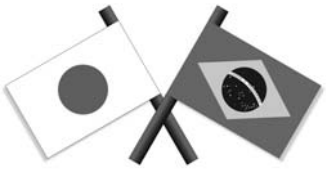
。移民の方々への配慮の深さ

語学については、五十代の終りにさしかかっていた師にとって、ポルトガル語を習得することは難しかったでしょう。しかし、証言にもあるようにラテン語が得意だったので、教会関係の権威者との交流には充分役立ったようです。

イタリア語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語の四つの言語の源はラテン語です。この四つの語を使う国民はかなり広範囲に及びます。

中村師がラテン語を得意としたことは、ブラジル宣教にとって大きな即戦力となったことがうかがえます。

今、さまざまな言語を耳にする環境で生きている私は、若い信者の方々が、せめて英語を話せる人として成長してほしいと願っています。もちろん、信仰生活が土台です。



小中学生合同黙想会

七月二十一日～二十三日の三日間、日毎に分けて、小中学生合同黙想会が福江教会にて行われました。今回は浦頭小教区の子供達は長崎、五島における日本二十六聖人殉教と牢屋の窄殉教について書物で調べて取りまとめ、みんなの前で発表する内容でした。史料からの年表作成や、どういった事が起こった等まとめていきました。

低学年児童が書いた十字架に張り付けられた少年の絵は、史料の通り、にっこりとした笑顔で書かれていました……

身近な史実を学べたのではないかと思います。

晴天に響く平和太鼓

「ヤッ！」という園児達の元気な掛け声と、小気味良い太鼓の音が青空に響き渡る。

伝統の平和太鼓を皮切りに、今年で創立五十周年を迎える平和のばら保育園の運動会が十月一日に開催されました。

コロナ禍にあって開催も危ぶまれましたが、保護者や祖父母も応援に駆け付け、子供達も元気いっぱいにグラウンド内を走り回り、大いに盛り上がりました。

環境保全・奉仕作業

10/16

半泊教会では、アリア様（像）の視線のもと内も外も浜も百周年式典にむけて準備開始…。

三十日の本番が待たれます。

（同時に堂崎の清掃作業も行なわれた。）

半泊教会百周年事業に寄せて

＝子どもの頃の記憶から＝

小学生の頃、侍者として当時の主任司祭であった野下神父様の運転の元、急カーブ、でこぼこ道の悪路を半泊教会に向けて車は走った。まだまだ三半規管が発達途上だったのか、助手席に乗りながら気分が悪いのを我慢しつつ、長い道のりを半分恨んだ。

夏休みには、野下神父様発案だったと思うが、侍者全員で半泊キャンプ。昼間、てんま船で少しだけの冒険を決行した。たどり着いた海岸線から、自分を含め数名が降り、小山の頂上附近から斜面を降り、半泊教会に向けて歩いて行く。当時、車のみならず船も苦手だった私は、てんま船で帰らなくて良かったと、内心〝しめしめ〟と思っていた。と、そこにやって来たのが、うっそうとした森の中にありがちな蜂の群れの出現!!

〝ワオッ〟という心の声が。バッと走り出したが、それが災いしたか。ちょっとだけチクッの感触…後で、少しだけ赤くなったが、そこは昔。今では、ばい菌が入るからやめとけと言われる〝小便〟をちょちょとつけてほったらかしておいた。そっからの記憶はあまりない。おおらかな時代だった。確か一泊したと思うが。今も半泊の教会の横にある小屋で夏休みの宿題をした覚えが頭の片すみにある。暑くて宿題どころではなかったが、今は懐かしい思い出となった。

秘跡

◎主よ、永遠の安息を

アントニオ　木口　清文
五十七歳　浦頭
七月十五日

アグネス　山本トシ子
八十八歳　堂崎
八月二十八日

モニカ　浜口ミツエ
九十七歳　大泊
十月二十日

○幼児洗礼

八月十五日
セシリア　鍋内一凜（いちり）
父・慎（マコト）　母・啓加（佐世保）

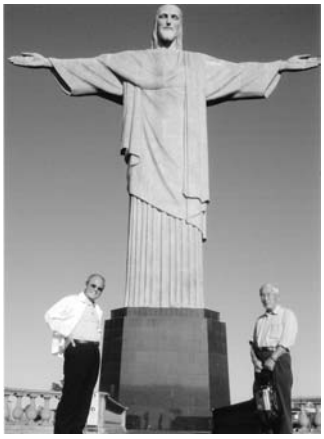
○ありがとう

次の方々より沢山の御芳志を頂きました。感謝致します。

福岡市博多区　坂本　砂子様
佐世保市瀬戸越町
松田トミ子様
神奈川県藤沢市
濵口末明　神父様

おたより

猛暑の夏も終わりに近づき、秋の気配を感じるころになりました。皆さんお元気でしょうか。



（リオのシンボル・キリスト像の前で）

ここしばらく『島のひかり』で中村長八神父様が取り上げられていますが、実は私も長八神父様が働かれていた場所とお墓を訪問してきました。ブラジルへの日本移民一〇〇周年を記念して講演を頼まれ、二〇〇八年の夏に行ったのです。ブラジルで働いていた神言会の故：長山武一神父様（曽根教会出身、二〇二〇年八月二十日帰天）から頼まれて行って来たのです。講演はもちろん日本語で行い、それを長山神父様がポルトガル語に通訳するという形で行いましたが、幸いに多くの日本人が集まってくれました。中には浜口姓の家族もいて、「親戚だ！」という人もいましたが、定かではありません。

（アルヴァレス・マシャードにある中村長八神父様の墓地）

その折、長山神父様が、長八神父様が埋葬されているアルヴァレス・マシャードと、長八神父様が働かれた場所へ案内してくれました。たまたまその時ブラジルへ来られた崎濵宏美神父様も同行し、一緒にミサを捧げることができました。

神言会司祭　**濵口　末明**

左から濵口神父、崎濵神父、（故）長山神父

★前号の集合写真は木鉢教会において撮られた写真です。

おたより（続き）

暑さも厳しい毎日でございます。島のひかりありがとうございました。

今年は暑さの中、コロナの増加のため大変な毎日でございますでしょう。教会の行事等、色々とどんなに苦しい毎日でございましょうが、山本神父様の銀祝も、御一緒にお祝い出来ない、本当に残念でございますね。

皆様方のお祈りが、神父様のお恵みだと思います。

及ばずながらお祈り致します。どうぞ一日も早く、コロナの終息のため、世界平和のためお捧げして参りましょう。本当に神父様をはじめ、信徒の皆様、お体を大切にし、一日も早くコロナ終息と世界平和のためお祈り致しましょう。

本当にいつも心に留めていただき感謝しております。皆様方お身体を大切にして御奉仕なさって下さい。

長崎市三ッ山町
ベタニア修道院
シスター赤尾スミエ

″カタシ″採ったど！

九月十六日、椿油作りが、鬼岳のふもとの四季の里で行なわれました。主催は子供教室。奥浦小学校の協力も得て、カッパ公園附近の椿の実を竹の道具等を用いてどんどん落としていきます。落した実は、地元の今村椿製油所で精油。

四季の里では、別個に油の種を用意してもらい、子供達は施設の指導者にやり方を教えてもらいながら、昔ながらの椿油作りにチャレンジ！黄金色の油が一瞬に出来あがる瞬間には目を見張った。

運動会 出来ました！

九月二十五日、秋晴れの中、小・中・奥浦地区の人達による合同運動会が行なわれた。コロナ禍も小休止し、なんとか昼食抜きで決行。

会場では子供達を含む選手の一挙手一投足を見逃すまいと観客の人達の顔が右にいったり、左にいったり。

特に小・中学生のソーランとエイサの踊りは圧巻！終った後、本部の前に並んでのリーダーが放った″撮影チャンスです″はうけ、バッチリだった。

編集後記

江口 初子

半泊教会の百周年に想う事。私は、五島、福江島に来て45年あまり、その頃はまだ戸岐大橋はなかった。奥浦の果は、私の中では堂崎・嵯峨瀬で、新しい真赤な橋を乗せた台船で戸岐湾へ…家族で渡り始めた時、どうして堂崎教会の近くに宮原教会・半泊教会があるのか？今になって判る。禁令時の残酷な迫害の末に勝ちとった「自由」を、「喜び」を証にしたのだと…。

私は小学生の時に絵本とマンガでキリストに出会った。結婚時に実母から『良かったねェ。キリスト教の人と縁があって』と、そして憧れの地、長崎で洗礼。それからは96才まで生きた義母がお手本。まだまだ未熟な私も68才に。高齢化も進み、半泊の信徒の歩みは浦頭教会にダブル。祈りの場所を先祖から受け継いだものを、たとえ一人となっても語り残し、伝えたい想いでの年月。神と共に歩んだ百年。これから先、実り多き年となりますように。